

# 潮流

潮流  
◆題字奥野誠亮

## 谷川 洋氏に聞く

(上)

認定NPO法人アジア教育友好協会理事長

### 学校建設と交流を柱に

——貴協会は、どのような活動理念や目的で活動をしていますか。

アジア教育友好協会(AEFA)は、学校建設事業と交流事業の二つを柱に活動しています。「受益者はアジアの子どもたち、そして日本の子どもたち」という考えに立っています。主にベトナム、ラオス、タイのインドシナ半島の山岳少数民族のための学校建設を進めています。教育環境の不十分な子どもたちに、建物だけではない、真の「学びの場」の創造を目指しており、村民による自主的学校運営を支援するプロジェクトではあります。どういうコンセプトで子

## アジアの学校建設を助け、交流する

アジアの山奥に学校をつくる。

地域の住民も主体的に参加する。

こうした学校づくりを支援しつつ、

日本と現地の子どもたちが交流する。

新しい国際交流の試みが

始まっている。



認定NPO法人アジア教育友好協会理事長

谷川 洋

たにかわ・ひろし◎1943年生まれ。福井県出身。東京大学経済学部卒業後、商社の丸紅に勤務。海外留学、貿易実務、企画経営など幅広く経験。2004年6月にAEFA設立準備を開始し、ベトナム、ラオス、タイの山岳へき村を現地視察し、同年12月に事業開始、理事長に就任。昨年、活動が認められ、認定NPO法人として登録される。

ちがつくつたんだ」という意識を現地の村の人たちが持つことを大切にしています。今までのODA（政府開発援助）などの学校建設では、都市部の建設会社の人々がやつてきて学校をつくることがほとんどです。完成後に雨漏りがあつて修繕が必要になつても、それを言う相手は地元にいないけです。われわれの学校建設は、大工の棟梁さんが地元の人にのこぎりのひき方まで教えて、村民も山から木を切り出したりして、自分たちが建設した自分たちの学校だという意識になります。これまで100校以上建設しましたが、1校も脱落することなく、

## 子どものスイッチを入れる

——「日本の子どもが受益者」とはどう

むしろ、建物が大きくなつたりしています。現地の子どもたちも、自分の親が手伝つているとなると、学校に愛着を持ちますし、学校での勉強も頑張ります。しかし、これだけでは足りません。建設した学校と日本の学校とがフレンドシップ校となつて、お互いの生活・伝統・文化を学び合うことで、日本の子どもにとつても、現地の学校づくりを手助けすることを通して、より深く学ぶことができます。

いうことでしょうか。

結局、国際交流は何のためにあるのかを考えると、この活動は、圧倒的に日本の子どもたちのためになっているのです。恥ずかしいですが、最初のころは、交流することで日本の子どもたちから文房具などが集まるのではという思いもありました。しかし、実際に交流をやってみると、「これは違うな」と感じました。日本の子どもたちの目が輝きだしたわけです。つまり、アジアの子どもたちの元気印の姿を日本の子どもたちに届けることで、日本の子どもたちの「心のスイッチ」がONになつたのです。例えば、現地の子どもたちは朝の水くみや家畜の世話などが毎日の仕事になつています。日本の子どもは、自分の生活と比べて当たり前だと思つていたことを見直すきっかけになりました。また「学校はうざい」と思つていた日本の子どもが、必死になつて勉強する現地の子どもの姿を見て、「恥ずかしい」と感じことがあります。「現地で学校を建設しようとする人たちを応援する」ためのアイデアをいろいろ考えるようになるなど、交流を通して日本の子どもたちが世界に視野を広げ、生き生きとした姿を見せてくれたことが、私たちにとって大きな喜びになりました。

——出前授業で、日本の子どもたちに、どんな話をされていますか。

出前授業で、「日本にはスーパーマーケットがあるけれど、アジアの山の中にも素晴らしいスーパー・マーケットがあります」と言うと子どもたちは驚きます。「でも森のマーケットには何でもあるけれど、受け身では何も手に入らない。自分が積極的に動いて探らないと駄目。大人になるまで、ずっと受け身で生活するのと、自分から動くような能動的生活をするとでは、どちらが生命力が付くかな?」と問い合わせています。そうすると、その話をした日の給食は誰も残しません。つまり、子どもは自分が納得すれば、スイッチが入るわけです。ですから、交流をするときも、相手の顔が見えるような交流を心掛けている。

不要になつたボールペンを届ける活動をしていても、「書けないボールペンをもらつたら悲しく思うのでは」と子どもたちも気付きます。そしてボールペンにどの程度インクが残っているかをチェックしたり、選んだりし始めます。単に上から目線で「かわいそだだから」というのではなく、思いやりの気持ちを持つて、交流相手を「仲間」と考えるようになります。このような日本の子どもの姿に接すると、やりがいのある活動だな、と私たちも実感できる喜びがあります。またそれを感じた先生方も、この活動の意義を実感してくださり、子どもたちと一緒にになって奮闘するようになります。

——現地の子どもたちにとつては、どんな良さがあるのでしょうか。

日本に友達ができたというのも、励みになりますが、同時に、ベトナムなどの社会主义国では、「絵はこのように描くもの」という形式がまずは優先されて指導されます。先生が教えた通りに描くので、みんな同じような絵になります。ところが、日本から届いた絵は大胆な色使いや個性的な作品が多いので、現地の子どもも先生もびっくりします。日本の子どもたちの絵に、自由な表現や自分の気持ちを吐き出すような表現を見て、先生たちも反省することがあるようです。

## 一 学校の維持発展の力に

——現地での学校建設で苦労したことは。

山岳地方の少数民族の人たちは、いろんな意味で差別を受けています。最初のころは、私たちが現地に入ると、政府の公安の役人がべつたりと付いて、余計なことをしないよう監視していました。手紙も全て検閲されましたが、全てをオープンにして、1年、2年と継続して入つていてうちに、互いに信頼関係ができてきました。交流を続けることは、現地の学校の維持・発展にも効果があります。年に1度か2度、日本からの絵や手紙などを届けますが、そのことが学校運営を投げ捨てない抑止力になつて

いるようです。先生も子どもたちも以前より立派な学校にしようと頑張ってくれます。

——日本では公立学校は特に、一度でき

ると、長く存続するというイメージです。

実は、建設した学校の隣にあつた学校が廃校になつたことがあります。現地の人たちは恥ずかしくて、なかなか言えなかつたそうですが、それを聞いて、それならその廃校になつた学校を分校にしようと提案して、その学校をつくつた時の欧米の支援者の了解の下、分校にして再出発することもありました。地域の人も再建に取り組みますし、教師も分校と本校で交流したり、研修したりと、両校が活性化することになりました。ラオスの政府も、この方式が山間部の学校維持に効果があると賛成してくれ、一つのモデルになつています。

——日本でも明治期に学校をつくつた時

は、地域の学校という意識がありましたね。まったく、その通りです。学校を地域が支えていくということがないと、本当の意味でその地域の教育を底上げしていくことにならないと思います。このように、学校をつくることが、村づくりになり、村が元気になつていく様子を見ると、こうした学校建設のやり方が大切ということが実感できます。

アジア教育友好協会＝<http://www.nippon-aafa.org/>